

## 平成 28 年度三重大学国際交流事業実施報告書（一般公開：日本語版）

東海地域においては南米やアジアからの労働者が増加しており、将来的には外国籍住民との共生社会が到来すると予想されています。他方、すでに 1970 年代以降トルコ系移民との統合問題を抱えてきたドイツでは、移民の背景を持つ住民自身および行政が、共生に向けてさまざまな取り組みを行っています。また、移民統合をはばむ最大要因であるナショナリズムや人種主義を防ぐために、ナチズムの過去を持つドイツでは、強制収容所の跡地やユダヤ人居住地区などに設置された博物館などによって、過去を忘れないための社会教育活動が活発に行われています。日本の次世代を担う学生にそうしたドイツでの取り組みを学ばせることで、東海地域での共生社会実現に役立つ人材を育てたいと思います。

ドイツでの研修は実質 6 日間でした。前半の 3 日間はベルリンで、女性用強制収容所の跡地を見学したり（図 1）、ユダヤ人を匿った人々の活動について学びました。また加害者としての過去を忘れないために、市内の各所に芸術的な「想起の記念碑」が設置されているのを見学しました（図 2）。



図 1 強制収容所のトロッコ

図 2 焚書が行われた広場にある「空の図書館」

後半の 3 日間は、移民の多いルール地方で、トルコ系モスクを訪問したり（図 3）、州庁の職員から初等教育段階での言語教育政策に関して話を聞いたり、小学校で移民の子どもたちに対してどのような教育が行われているのかを参観しました（図 4）。



図 3 モスク訪問

図 4 小学校での授業見学

現場を体験することで、参加学生は大きな刺激を受けました。70 年前のナチスの歴史は、もはや「教科書に書かれていた昔の出来事」ではなくなり、シリア難民は自分たちと同世代の若者の問題として受け止められるようになりました。参加学生たちには、今後、文献などをおして問題意識をさらに深めてもらいたいと思います。